

変わらない言葉を

礼拝にふさわしい聖書を――

変わりゆく世界に

31年ぶり、6から翻訳した新しい聖書



(上) 2019年2月22日銀座教会の奉献式／(左上) 2018年12月3日に開かれた共同記者会見／(左下) 教文館キリスト教書部で発売された聖書協会共同訳

特集

変わらない言葉を 変わりゆく世界に

31年ぶり新翻訳『聖書 聖書協会共同訳』完成

2018年12月、ついに『聖書 聖書協会共同訳』が発行されました。

今号では新翻訳事業の経過報告とともに、

新翻訳事業に携わってこられた様々な立場の方々による、

新しい聖書によせる期待をご紹介します。―― 編集部

新翻訳事業の始まりから
完成までの道のり

日本聖書協会総主事 渡部 信

I. 準備期間（二〇〇三―二〇一〇）

序

一九八七年、『聖書 新共同訳』が発行されました。新共同訳は、カトリック教会とプロテスタント教会が、初めて共同で翻訳を完成したもので、日本のキリスト教史に新しい時代を築き、エキュメニズム（教会一致運動）を体現する画期的事業でした。しかし、当時、翻訳方針を巡っては紆余曲折がありました。動的等価（意訳）理論に基づいて翻訳した『新約聖書 共同訳』（一九七八年）は、諸教会から採用に否定的な声が寄せられました。その結果、翻訳方針を逐語訳へと見直したのが『聖書 新共同訳』です。完成までには一八年の歳月を要しました。新共同訳は、読者からの指摘を検討し、訂正作業を続けました。（二〇一〇年まで「共同訳聖書委員会」、以後は事務局）。しかし、翻訳方針の変更などに伴う訳語、訳文の未調整部分が課題として残りました。

なお、共同訳聖書出版の準備のために、一九六九年、日本聖書翻訳研究会が組織され、その学究的成果を残すため、研究誌『聖書翻訳研究』No.1～33が、一九七〇年から二〇一四年まで

発行されました。

再度の共同訳聖書の翻訳への試み

次世代の翻訳聖書には、その準備と作業で、最短でも一五年位かかると想定されました。前もって最新の翻訳理論を研究し、堅固な基礎の上に新しい翻訳事業を開始しなければなりません。その調査のため、二〇〇三年、新しい聖書翻訳の成功事例をもつ、スウェーデン聖書協会（六月）とオランダ聖書協会（二〇月）を訪れ、翻訳理論と作業プロセスを学び、日本聖書協会内で検討しました。そして二〇〇五年、聖書の原語専門の職員三名を採用して翻訳部を新設、本格的に新翻訳事業の準備を開始しました。その経過は以下の通りです。

新翻訳の準備としての講演会・聖書翻訳ワークショップ

・国際聖書フォーラムの開催（二〇〇六年五月・海外講師八名、二〇〇七年六月・海外講師五名）。

・聖書翻訳ワークショップの開催（二〇〇八年三月・海外講師一名、国内講師三名）。

新翻訳の準備としての翻訳懇談会

・理事、評議員による翻訳懇談会を開催。第一回（二〇〇七年三月）、第二回（二〇〇七年一〇月）、第三回（二〇〇八年三月）。

新翻訳の準備としての諮問会議

・新翻訳に向けて共同訳事業推進計画諮問会議

年三月・裾野市）、第九回（二〇一七年八月・那須町）

また、翻訳者による研究誌『New聖書翻訳』No.1～5（二〇一四～二〇一九）を発行しました。聖書本文の確定と発行に向かつて

合宿の他、本文朗読チェック、編集委員会での本文検討、日本語と使用漢字のチェック、訳語の統一性チェック、外部モニターによるチェックと、様々な作業が行われました。これらのプロセスを経て、二〇一五年二月より、完成前の翻訳文を「パイロット版」として公開、一般読者からの意見を募集し、更なる聖書本文の推敲に努めました。

最終翻訳原稿は、二〇一八年二月から組版を開始、初版は、引照・注付きの聖書としました。二〇一八年二月、日本聖書協合理事会での出版承認を経て、一二月、『聖書 聖書協会共同訳』が完成し、発行されました。

最後に、新翻訳事業が一六年の歳月をかけて、完成に至ったことを主に感謝すると共に、そのため労してくださった翻訳関係者、ご意見をくださった全ての方々、支援と祈りをもって助けてくださった全ての人々に感謝します。二〇一九年二月二日、日本基督教団銀座教会にて感謝の奉獻礼拝を行いました。主に捧げられた『聖書 聖書協会共同訳』を通して、日本の方々が聖書の御言葉に触れ、福音のメッセージが全ての人々に届きますようにお祈りしたいと思います。

を開催。第二回（二〇〇八年一〇月）、第二回（二〇〇九年三月）、第三回（二〇〇九年五月）オランダ聖書協会の成功事例を参考に「翻訳方針前文」を採択、第四回（二〇〇九年一〇月）理事、評議員との協議会を開催。

新翻訳事業開始の決議と作業開始

・日本聖書協合理事会、評議員会（二〇〇九年二月）「翻訳方針前文」に基づき翻訳事業開始を決議。

・日本カトリック司教協議会臨時総会（二〇一〇年二月）新翻訳の共同事業を決議。

このように、実際の翻訳作業に入るための準備に八年間を費やしました。そして、対象や目的を予め選択し、適切な翻訳方針を決定していく、オランダ聖書協会の「スコボス理論」を採用する方針を固めました。その唱道者ローレンス・デ・ヴリース氏を講演のため二回日本へ招聘しました。その結果、諮問会議に議員を派遣くださった一八の教派と団体が、新しい翻訳方針を検討、賛同されたことにより、実際の翻訳作業が二〇一〇年から開始されることになります。

II. 翻訳期間（二〇一〇～二〇一八）

翻訳者への講習会

翻訳者は各教派、諸教会から推薦をいただき、原語担当者は聖書学者、日本語担当者は文学、国語学の専門家、翻訳家、詩人、歌人など、幅

広いジャンルから招きました。翻訳者には「パラテキスト」（後述）講習を行いました。

・第一回オリエンテーション（二〇一〇年八月・アルカディア市ヶ谷、翻訳者二六名）を開催。以後二〇一六年まで随時、個別オリエンテーションを開催。

・翻訳者全体会議（二〇一一年八月の三日間・ヴィラフォンテーヌ汐留）開催。この会議が事実上の共同翻訳作業の開始。旧約部会、詩編部会、続編部会、新約部会、日本語部会が形成される。

翻訳作業を促進するための合宿と研究誌

今回の翻訳作業には、聖書協会世界連盟が開発した聖書翻訳支援ソフト「パラテキスト」が用いられました。即座に原語、主要翻訳、過去の邦訳、翻訳用注解書などを参照できるソフトです。それにより複数の翻訳者が訳文を検討する翻訳者委員会は、大幅な効率化と時間短縮が可能になりました。さらに、翻訳者委員会の集中開催のため、修道会が経営する黙想の家を利用して以下の翻訳者委員会合宿を開催しました。

・第一回（二〇一三年九月・軽井沢町）、第二回（二〇一四年三月・世田谷区）、第三回（二〇一四年八月・裾野市）、第四回（二〇一五年三月・鎌倉市）、第五回（二〇一五年八月・那須町）、第六回（二〇一六年三月・裾野市）、第七回（二〇一六年九月・裾野市）、第八回（二〇一七

次期総主事 具志堅聖氏のご紹介

2019年度の5月以降には、現在の具志堅副総主事が次期総主事として就任いたします。具志堅副総主事は、2年前までハワイにあるマキキ聖城キリスト教会の日本語部牧師として伝道・牧会に従事し、2017年9月に日本聖書協会へ副総主事として招聘されました。

沖縄県出身で、2011年まで日本福音同盟（JEA）総主事として日本の諸教会のためにご尽力された方です。どうぞよろしくお願いします。



キリスト教視聴覚センター（AVACO）のご紹介

一般財団法人キリスト教視聴覚センターは2019年1月1日をもって一般財団法人日本聖書協会と合併いたしました。AVACOの名称で親しまれた働きはそのまま継続され、幼児・子供向けのキリスト教教育教材、講習会、またメディア・録音関係の仕事も、日本聖書協会と連携しながら活動を進めて参ります。ホール、会議室の貸し出しも行っております。グループ会社による録音、撮影業務でも、皆さまのご用にお応えしたいと思います。ぜひお気軽にご相談ください。



169-0051
東京都新宿区西
早稲田2-3-18
電話
03-3203-4121

オンラインキリスト教ニュース

インターネットでクリスチャンプレスと検索してご覧ください。トップページを開くと毎日更新される聖書の言葉がポップアップ表示されます。日本聖書協会デジタルメディア部が運営しています。www.christianpress.jp



▲スマートフォンから



座談会

『聖書 聖書協会共同訳』を翻訳して



(2018年12月7日、日本聖書協会にて)

ご出席者（五十音順）

阿部 包

藤女子大学特任教授・名誉教授、
同大学キリスト教文化研究所所長、
新約編集委員会翻訳者兼編集委員

飯 謙

神戸女学院院長、神戸女学院大学教授、
詩書・預言書編集委員会翻訳者兼編集委員

春日いづみ

歌人、日本歌人クラブ中央幹事、現代歌人協会会員、
詩書・預言書編集委員会翻訳者兼編集委員

吉田 新

東北学院大学文学部総合人文学科准教授、
統編編集委員会翻訳者兼編集委員

司会 島先克臣 日本聖書協会編集部主事補

翻訳作業に携わって

島先 まず、作業とか、会議とか、ご自分の翻訳したプロセスでも、いちばんの思い出になっているものを一言。

阿部 新約の部分で、スカイプ導入になったでしょう。それで、わたしの場合はパートナーが東京の芳賀繁浩先生じゃないですか。スカイプをつないで、パラテキストで毎週金曜日の夜九時から一コマずつ、ずっとやっただんです。それがいちばん思い出に残っていますね。彼は、ギリシア語もできるから、日本語担当ではないような突っ込んだ議論もいろいろできて。それからやはり、合宿が楽しかったですね。

吉田 今回、スコポス^{※2}理論という新しい翻訳理論を採用したことは、成功であったと個人的には思います。具体的な作業の中で迷ったとき、最終的な着地点が明確に示されたというのが大きかったです。初期の段階から日本語担当者として原語担当者が密に連携して訳文を進めていったのが今回の翻訳の特徴のひとつです。それは新共同訳の聖書翻訳にはなかった作業過程です。この初期の段階でも議論がありました。おそろしく最も議論したのは翻訳者委員会だったと思います。そのときに、朗読した際、どのように聞こえるか、教会で読まれるときにふさわしい訳語は何かといったような議論の着地点が明確にあったので、そこに落とし込んでいくという

ただいたと考えています。聖書学に携わる人には時として、可能性を追求するあまり奇抜と思える訳を試み、個性を際立たせようとする傾向がある。自分のことです。しかしこの翻訳事業を通して、歴史の中に立つというスタンスをよく理解させられたと感謝しています。

それから、合宿はたいへん印象深く思い出されます。一緒に翻訳する人と人格的な相互理解の中で進めていくことができた。毎朝の礼拝の時間でも、その方の人となりとか、個人史を知ることが許され、ああ、こういう思いで聖書に向かっておられるのかと。聖書への理解を深める大切な時間にもなりました。単に仲間どうしでやったという意味ではなくて、適度な緊張関係もありました。互いに相互理解に努めようとする良質な共同体の中で生み出された聖書だということ、これを読まれる皆さんにもお伝えたいと思います。

吉田 わたしは「聖書協会共同訳」は、「共同訳」というところがいちばん重要で、この聖書翻訳はいわゆる教会一致運動の一つの結実だと思っっているんです。ですから「共同」という文字はやっぱり外してはいけなかったというふうに個人的に思っている。非常に印象深かったのは、第一コリント書の一章の議論をしていたときに、さてこれはカトリックのミサで問題ないだろうかという話し合いがあったんですね。「主

作業はやりやすかったと思いますね。

春日 最初に島先さんから「美しい日本語、礼拝にふさわしい、格調の高い日本語」そして「日本文化に影響を与えるほどの」と唆されまして。…（笑）それは、やはり日本語で表現するものにとって、とても魅力的な言葉で、力を尽くしたいと思いました。

思い出は沢山ありますが、原語の先生方からヘブライ語の文法や釈義を伺ったことは貴重な体験でした。日本語についての意見も真摯に受け止めてくださり、大いなるものに向かって共同作業をしている感覚でした。一言一句にこだわりましたが、編集会議のときに接続詞一語で一時間かかったことがあるんですよ。サタンが主を唆すところ（ヨブ記二章五節）。

島先 ああ、五節冒頭に「しかし」をつけるかどうかという…。

春日 そうそう「しかし」、出来上がったものを見ると接続詞はないのです。「さあ」、「だが」「しかし」など相応しい言葉を探しましたが、議論の末、別訳に載せようということできなくなりました。今読んでみると自然に読めるけれど、十数人が頭を突き合わせ一時間話し合った結果なのです。すべての箇所にもこのようなことがあって、翻訳者委員会にしても編集委員会にしても、おろそかではない熱い時間を過ごしたと思います。

イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りを献げてそれを裂き、言われました。『これは、あなたがたのための私の体である。』（一コリ一・二三、二四）という…。プロテスタントにとってもカトリックにとっても重要なテキストですが、この訳文を議論したときに、じゃあ、これで大丈夫かという話し合いをしたときに、神父さんにミサの所作をしてもらい、確かめてもらおうと言って、後ろで旧約かなにか訳していた神父さんにやってもらったんです。これでいいかどうか。そういうことは普段では議論できない。まさにエキューニズム^{※1}だとそのとき感じました。やはり合宿というのがすごく濃密な時間だった。朝の祈りから始まり、翻訳に取り組み、一緒にご飯を食べて、寝て、また朝の祈りから始まる。あれは聖書翻訳というよりはむしろやはり教会一致運動の一つの重要な交わりだった。それが各人に持ち帰られていくという感想を持ちました。

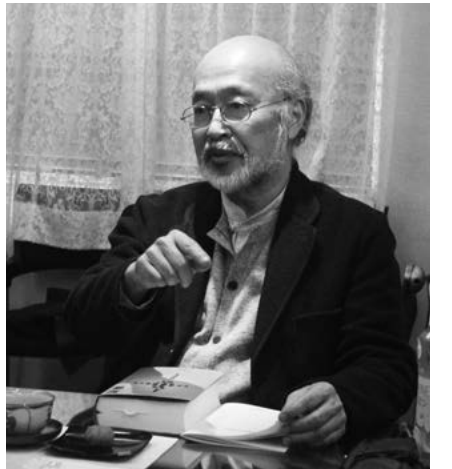
困難をどう乗り越えたか

島先 今度はずしこし話題を変えまして、困難をどういうふうに乗り越えたか、大変だったところに焦点を当てていきたいと思うんですけれども。

阿部 やっぱり^{※3}ピステイス^{※3}問題ですよね。かなり遅くまで続いた議論だったと思う。初めの頃

※1 翻訳者が用いた聖書翻訳支援ソフト

※2 スコポス（目的・対象）を予め設定し、それに応じて適切な翻訳方針を決定していくという考え方



阿部 包氏

阿部 わたしは基本的に、イエス・キリストのピステイスが人を義とする尺度だと思う。わたしたちの信仰はわたしたちを義としないんですよ。

島先 なるほど。

阿部 ここでたぶん、信仰理解が分かれるところだと思う。

島先 吉田先生、いかがでしょう。

吉田 続編ですね。続編の担当を任されたときに、これは大変なことを引き受けてしまったと思って、相当自分の身を削ることになるかと覚悟しました。続編のテキストは本当に難しく、新共同訳の続編の翻訳作業は偉大だったというところが、まず、今回の作業の中で分かりました。また、現在、世界的に続編の研究が相当進んでいるんですね。これらの研究とやはり同じレベルで立ち向かっていく翻訳は必要になると思います。続編の翻訳者、及び日本語担当者の中でプロテスタントは半分近くいらっしやいますよね。そういう意味では、とてもエキキュメンカルな作業だったと思います。日本の翻訳史上、続編の翻訳はとても大きな業績だったと思います。続編を通して新約を見ないといけないというのを、本当に強く思いました。旧約と新約をつなぐ接点点がヘレニズム時代のユダヤ教であって、そこからイエスが生まれ、そしてパウロが生まれていったという感じになっています

島先 これは牧師先生方がやっぱりロマ書全体の神学から釈義していくしかないですよ。



吉田 新氏

阿部 脚注が付いたこと。引照の情報だけではなくて、直訳だとか、異読もあって、必要なところでは分かる。読むときに便利だし、長すぎないのがいい。

吉田 わたしは一九七八年生まれで、共同訳聖書が出版された年と同じです。ですから、わたしにとって聖書は新共同訳なんです。新しく生まれてくる子どもにとって、聖書協会共同訳が彼、彼女らの聖書になります。つまり、この聖書は次のジェネレーションの聖書になります。聖書を次のジェネレーションに渡すという、大きな仕事に携われたと思いました。新しく生まれてくる子どもにとっての聖書はこれなんだという…。

春日 絞れませんが、箴言は寸鉄詩のように歯切れよくなっていると思います。コヘレトの冒



春日いづみ氏

頭も「空しい」が「空」になりましたけれど、意味が限定されず、解釈が広がります。それから夫婦の「楽しめ」というのが「人生を見つめよ」(九九)に変わりましたね。

島先 あれは今までの、外国の訳にもない、全く新しい訳なんです。

春日 コヘレト三章の「生まれるに時があり、死ぬに時がある」(コヘ三・二)というところもリズムが揃い、暗唱などしやすくなったのではないですか。情景、状況が読むだけで、聞くだけで目に浮かぶ箇所が増えたように思います。この翻訳の時間を多くの祈りが支えてくれた。合宿中も修道院のシスター方が祈ってくださいました。そして聖霊が確かに働いていたと感じています。

島先 シュナイダー神父様が、「聖書翻訳は神



飯 謙氏

よね。

春日 私は詩文を担当しました。特に詩編はカトリックではミサや教会の祈り(聖務日課)で毎日歌い、または唱えるので、リズムやひびきが自然で、心にすっと入ってくるようにと心掛けました。聖書は縦書きですので、パラテキストを縦書きにプリントアウトをして、声に出して読むことを心掛けました。目に触れた印象も、言葉のひびきも大切です。翻訳の最終段階に近づくに当たって、書全体を通して読むようにしました。そのためには誰にも邪魔されない時間が必要で、合宿はとても有難かったです。

聖書協会共同訳への期待

島先 それでは最後に、「ここが押し」と「期待すること」を一言ずつ。

の業です。祈りによって進めるものです」というメッセージを残してください。

飯 新共同訳はすこし説明的な表現が多かったのに対して、今回はやはり簡明になったと思います。言い切りとか、リズムのよさ。説明的でないぶん、読者自身が解釈する余地が広がった点、これは祈りを導くものとなります。聖書は、元来は巻物で部分的な朗読が中心でしたが、やがて製本されて通読のための書となりました。テキストを思い巡らせる空間が広がった。わたしは詩文をやらせてもらいましたが、ここは一息に読んでいくという、段落を示唆する工夫もできたのかなと。一つのユニットを区切りで読んで、その中の最初の言葉のつながりや差異を、比べるなどして、聖書との新たな出会いをしていただけるのではないかと期待しております。

島先 今日はありがとうございました。

司会、島先



新しく出版された 聖書協会共同訳の魅力



鈴木佳秀
すずき よしひで／
フェリス学院学院長、
五書・歴史書編集委員会 編集委員

今回新たに出版された聖書協会共同訳には、聖書学関係者はもちろんのこと、多数の日本語の専門家や詩人たちが関与している。そのため、美しい日本語を保ちつつも、原典に忠実であるという本質を失っていない。引照・注付きなので、原語の意味も分かるようになっていて、

新共同訳が出版された折に、口語訳聖書の詩篇二三篇にあった「緑の牧場」や「いこいのみざわ」などの言葉から命名された緑幼稚園やみざわ教会が、新共同訳ではその名前の基になった言葉が消えていたため、悲鳴をあげていたのをよく覚えていて。今回の聖書協会共同訳では、そうした美しい言葉が「緑の野」「憩いの汀」として復活しているのを見て、嬉しくなったのが正直な感想である。詩編全体が、朗読する際に、日本語としてのリズムを回復させているのも、今度の共同訳の大きな特徴と言える。

コヘレトの言葉三章一節から二節までの訳も、新共同訳では「……時」とされていたが、「時がある」と言葉が省略されていないので、読みやすく、極めて素晴らしい日本語になっている。

例えば八節では新共同訳で「愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時」となっていたのが、新しい聖書では「愛するに時があり、憎むに時がある。戦いの時があり、平和の時がある」となっている。また一一節では新共同訳の「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない」が、新しい訳では「神はすべてを時に適って麗しく造り、永遠を人の心に与えた。だが、神の行った業を人は初めから終りまで見極めることはできない」となっている。日本語としての美しさやリズムが、残されていると言える。筆者は箴言三二章一〇節から三二節の訳からもまた、新共同訳では味わうことがなかったほどの感銘を受けた。それを紹介して、本稿を閉じることにしたい。

「有能な妻を見いだすのは誰か
彼女は真珠よりもはるかに価値がある。
夫は心から彼女を信頼し
儲けに不足することはない。

彼女は生涯にわたって

夫に幸いをもたらし、災いをもたらすことはない。羊毛と亜麻を求め 手ずから喜んで仕立て上げる。商人の船のように 遠くから食物を運んで来る。彼女は夜明け前に起き出して一家の食事を整え 働く若い女たちに指図を与える。よく思い巡らしたうえで畑を購入し 手ずから得たもうけの果実でぶどう畑を設ける。力強く腰に帯をし 腕に力を入れる。取り引きが好調であることを確かめ 灯は夜も消えることがない。

子らは立ち上がって彼女を祝し
夫も彼女をたたえて言う。

『有能な働きをなす女は多いが
あなたはすべてのすべにまさっている。』
あてやかさは偽り、美しさは空しい。
主を畏れる彼女こそ、誇ることができる。
彼女の手の実りを彼女に与え
その働きを城門でたたえよ。』
(箴言三二・一〇―一八、二八―三二)

「聖書 聖書協会共同訳」 完成に寄せる



岡田武夫
おかだ たけお／
カトリック東京教区名誉大司教、
カトリック本郷教会協力司祭

八年もの歳月をかけての大事業の完成に感謝と祝意を表明します。わたくしも外部モニターとして参加しました。いつも締め切りに追われながら必死で回答したことが懐かしく思い出されます。翻訳担当ではありませんでしたがギリシア・ヘブライ語の知識の必要を痛感しました。そしてこの仕事は自分のためにもなったと喜んでいきます。この事業の趣旨と経緯については、二冊の冊子「聖書 聖書協会共同訳 特徴と実例」「聖書 聖書協会共同訳について」によって説明されています。ご覧いただくと非常に勉強になります。あらためて聖書の翻訳という難事業のご苦労が伝わってきます。

新しい聖書の特徴は「スコポス理論」にあります。これは「礼拝で朗読される聖書を目的（スコポス）にしている」という理論であると丁寧に説明されています。礼拝で朗読されるのに適した聖書翻訳を目指して、と理解されます。

聖書は本来礼拝で使用されるべきものであります。イエスもナザレの会堂でイザヤ書の巻物を手にして朗読したと思われれます。

礼拝の時には聖書の朗読に心を集中しなければなりません。そのためにはまず聖堂の構造、装置が適切でなければなりません。何より朗読の仕方が重要です。わたしはミサを司式していますが、聴いていて、「よく心に響きよく分かる朗読」にはあまりお目にかかりません。これは読み方の問題ですが、テキスト自身の問題でもあります。聖書朗読のテキストが耳で聴いただけではよく分からないような表現になっている場合が少なくはないのです。そのため礼拝のために冊子が使用され、そこに朗読聖書が掲載される場合が多いと思います。冊子は、会衆の聖書理解のために有益ですが、会衆の「聴く」という努力を疎かにする結果をもたらすことになりかねません。朗読は耳で聴いて分かるものでなければならぬし、会衆は「聴く」という努力に専念して欲しいと思います。

今回の聖書が「礼拝にふさわしい聖書」と謳っていることは大いに結構なことです。その所期の目的が適えられることを期待しています。この目的がどのくらい適えられるかは、実際に

試してみないと結論が出ないでしょう。この機会に礼拝（典礼）の在り方についても、各教会が協力して改善を図るべきだと思います。ところで、論争を呼んだ訳語の一つが「ツアラート」であります。これは「規定の病」に落ち着きました。その経緯を説明する文書を頂戴して検討の苦労の様子が伝わってきました。「重い皮膚病」が不適切ならどのような表現がよいか？ 多大な議論の結果が「規定の病」であります。「規定の病」では耳に聴いただけでは、一般人の人には分かり難いかもしれませんが、さいわい巻末の用語解説「規定の病」に簡潔な説明がありますのでそれを活用ください。

なお、この巻末の用語解説は非常に有益です。非常に重要な用語が簡潔に説明されています。他の用語についても是非参照頂くようお願いいたします。